令和４年度 兵庫県立農業大学校評価シート

［教育目標］
国際化する農業に対応するとともに、地域社会の多様化等、変化の激しい農業に対応する幅広い知識、高度な農業技術及び経営管理能力を修得させ、地域社会の有為な形成者となる意欲的な農業の担い手と地域農業を牽引する指導者を養成する。

［重点目標］
Ⅰ　次代の農業を担う意欲の高い学生の確保
Ⅱ　実践的教育の充実・強化による学生の資質向上
Ⅲ　就農率の向上に向けた学生指導の充実

［達成度の基準］
Ａ　目標を上回っている
Ｂ　目標どおりに進捗している
Ｃ　目標を下回っている

Ⅰ 重点目標 ： 次代の農業を担う意欲の高い学生の確保

現 状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過･達成実績	今後の取り組み･課題と改善策	学校評議会委員の意見	達成度
1 定員 40 名に対し直近２年間の競争率は 1.2 倍。しかし R4 年度の受験者は、定員を下回った。 （入試受験者 R3:60 名、R4:31 名） 2 入学者は 32.8 名で定員充足率は 82.0%。 (H30~R4 年度平均) 3 農業高校からの入学者は 62.8%、実数 20.6 名。 (H30~R4 年度平均) 4 推薦入試による入学者実数は 22.2 名で 67.7%。 (H30~R4 年度平均) 5 ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ参加者は 66.6 名。 (H29~R3 年度平均、募集人員:R2 まで 80 名、R3 はｺﾛﾅで 60 名)	高校･関係機関等との連携協力	1 高校の進路指導担当者等へ大学校の情報を提供 ① 農業高校:高等学校教育研究会農林水産部会などを通じて ② 普通科高校等:今年度から新たに高校進路指導研究会(以降「進指研」)を通じて 2 農高生のつどい等の場で農大生が高校生へ魅力を伝達 3 県教育研修所と連携した農業高校教員研修会の開催 ---------- 【評価指標】 1 大学校情報の提供 ①農業高校への説明:11 校 ②進指研での説明:3 地域 2 高校出身者を引率しての大会参加 3 農業高校教員研修会の開催	1 進指研を通じて普通科高校等の進路指導担当者等へも情報の提供を開始 進指研は直近の10年間で入学実績の多い地域に出席。また、本校のｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽまでに出席し、PR動画等を活用して認知度の向上を図った。 【実績】 1 大学校情報の提供 ① 農業高校等の進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽに出席　県農＊2回・佐用＊2回・上郡2回・播磨農高・但馬農高・淡路・錦城・県立尼崎　の延べ11高校 ＊は各校卒業の農大生も出席 ② 進指研で説明:4地域(5/17 定時制東播支部、6/16 神戸支部、6/21 東播支部、7/14 阪神支部) 2 新しい農業をめざす高校生等のつどいに参加(11/17) 3 県教育研修所と連携して農業研修を実施:10/31、高校の教員など4名参加 ＊ 入試結果(合格者数/受験者数):41名/50名、受験者数が定員の1.3倍に回復	1 受験生に選んでもらえる大学校となるために、大学校の情報を発信 (1)高校の進路指導担当者への情報発信 ｱ 農業高校:高等学校教育研究会農林水産部会などを通じて ｲ 普通科高校等:「進指研」対象地域の拡大 ｳ 映像を活用した情報の提供 (2)高校主催進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽへの出席	1 農業高校教員との交流を深めることで、農大の施設規模や教育内容を理解できる。このことで教員から農業系高校生へ農大の魅力が伝っていくことになる 2 普通科高校等の生徒等へは更にＰＲすべき	A
	大学校の PR	1 進指研を通じた普通科高校等への進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽを強化 2 農業大学校の特色が、より理解しやすいように募集ﾊﾟﾝﾌを改訂するとともに、学生募集要項の配布時期を前進 3 農業改良普及ｾﾝﾀｰ(以降「普及ｾﾝﾀｰ」)、JA や市町等への農大関係資料の配付と受験者掘り起こしなどの協力要請 ---------- 【評価指標】 1-1 進指研での説明･PR:3 地域(再掲) 1-2 進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ(R3:延べ 14 校→15 校) 2 ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ改定と学生募集要項等配布の前進(7 月→5 月)	1 進指研を通じた普通科高校等への進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽを強化【再掲】 2 ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ及び学生募集要項の改善と早期配布 (1) ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ及び募集要項に「農大HP」「学生募集」「農大生の声」のQRｺｰﾄﾞを貼付し、ｽﾏﾎ等からも農大の特色にｱｸｾｽきるよう改善。 (2) ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ･学生募集要項:県立高校136校、市町･JAに配布 【実績】 1―1 進指研での説明･PR:4地域(再掲) 1-2 進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ:延べ15校(再掲) 2 ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄの改訂と学生募集要項等配布の前進:5月中旬配布	1 受験生に選んでもらえる大学校となるため、大学校の魅力を PR (1) 農大の特色の PR 特色:実践学習、資格取得、農家等派遣実習、ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ、4 年生大学編入、就職状況 (2) 進路指導担当者や進路ｶﾞｲﾀﾞﾝｽでの映像の活用	1 魅力発信のためにＨＰの更なる充実を ・高校生へのアピールを意識した表現やレイアウト ・就農以外の就職先も明示 ・取得できる資格を詳細に	A
	ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞによる情報発信の強化	1 ﾄﾋﾟｯｸｽ等、農大情報の積極的な発信(R3 年度:35 回) 2 ﾀｲﾑﾘｰな入試情報等の発信 ---------- 【評価指標】 ﾄﾋﾟｯｸｽ発信、卒業生の就職状況、過去の問題等の掲載(40 回以上)	1 ﾄｯﾋﾟｯｸｽでの情報発信【実績】 月 / 4-6 / 7-9 / 10-12 / 1-3 / 計 件数 / 15 / 38 / 25 / 22 / 100 8月中旬以降は、学生が作成した卒論進捗状況や実習の紹介等も掲載 2 お知らせ他【実績】 入試合格者を「お知らせ」でも発表。農大生の声、過去問等を掲載。	1 ﾄﾋﾟｯｸｽ･お知らせ等でのﾀｲﾑﾘｰな情報の提供 2 学生による情報発信	1 高校生へのアピールを意識した表現やレイアウト【再掲】 2 卒業生からのＳＮＳ発信が農大の魅力アップに繋がる	A
	農大見学会、ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ等での PR	農大見学会の新規実施(6 月に高校 3 年生を対象、定員 30 名) 2 ｺﾛﾅ対策を講じたｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽの開催(8 月、2 回) 3 個別見学の受け入れ ---------- 【評価指標】 1 見学会参加者:定員 95%以上 2 ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ参加者:定員 95%以上 3 個別見学の受け入れ:適宜	1 見学会を新規開催(6/4、29名参加(農業系高校25名、その他の高校4名)) 2 ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ開催2回 (8/2･18、1回目36名、2回目39名、計75名参加) ｺﾛﾅ対策として、参加生徒を2教室に分散。また、在学生との交流では、同伴者は別室でのｵﾝﾗｲﾝ参加とした。さらに昼食は、黙食で体験。 3 個別見学会等の対応 【実績】 1 見学会参加者:定員(30名)の97%、農大希望割合:76% 2 ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ:定員(80名)の94%、農大希望割合:1･2回目とも82% 3 個別見学4回(8/26 2名、9/12 1名、10/18 1名、11/1 1名、農大希望割合100%) 4 県立農業高校 農業科の1年生(11/4、39名)	1 ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽの開催 2 見学会開催の検討	1 見学会は、高校２年生を対象に開催する方が効果がある	A

Ⅱ 重点目標:実践的教育の充実・強化による学生の資質向上

<table>
<tr><th>現 状</th><th>評価項目</th><th>具体的方策及び評価指標</th><th>経過・達成実績</th><th>次年度の課題と改善策</th><th>学校評議会委員の意見</th><th>達成度</th></tr>
<tr><td rowspan="2">1 講義に対して実習時間が1.4倍と実践的教育を重視

2 連携協定企業の GAP や農福連携の取組を学ぶ等、ｶﾘｷｭﾗﾑ改善に取り組んでいる

3 資格取得を推進しているが、合格率の低い資格がある
日本農業技術検定 2 級(農大卒業程度):R3 合格率21%

4 ｽﾏｰﾄ農業の教育強化のため、環境制御装置、GPS付農機具、畜産遠隔管理装置等を導入

5 学生自治会が主体となり、ｺﾛﾅ禍でも規律ある寄宿舎生活を実践</td><td>知識・技術に関するｶﾘｷｭﾗﾑの強化</td><td>1 学生参画のもと専攻実習に関する目標や活動計画づくりとその実践
2 実習内容の充実(畜産課程)
3 教員・農大職員や企業等との相互交流を促進

【評価指標】
1 学生参画のもとでの専攻実習の体制づくりとその実践
2 削蹄師の指導による削蹄技術講習
3 高校教諭や企業等との交流の場の開催</td><td>1 専攻部長以外に各品目・畜種の担当を決め、ﾎﾜｲﾄﾎﾞｰﾄﾞやｶﾚﾝﾀﾞｰを活用しながら日々の防除、収穫等を実践している。学生の実践範囲は、担当に留まることが多く専攻全体の活動状況が共有できていない。
2(1) 畜産専攻全ての学生にﾛｰﾌﾟﾜｰｸ、体測定、機械運転等を全ての学生が修得できるように取り組んだ。また、全国和牛能力共進会及び県畜産共進会への出品に備え外部削蹄師による削蹄を実施。
(2)1 年 1 産を目標に繁殖牛の体重及びﾎﾞﾃﾞｨｺﾝﾃﾞｨｼｮﾝｽｺｱ測定等を実践。また神戸ﾋﾞｰﾌ認定率の向上を目標に肥育牛の血中ﾋﾞﾀﾐﾝ A 測定・ｺﾝﾄﾛｰﾙを実施。
(3)家畜人工授精技術向上のため繁殖母牛への直腸検査、ｴｺｰ検査、人工授精(延べ30頭)を学生が実践。
(4)但馬牛経営への参画意欲醸成に向け、美方地域生産者との交流を実施(2/14)。
3(1)農業系高校の教員及び実習助手(4名)を対象に本校の教育専門員が講師となり、農業機械に関する知識と操作技術の習得を実施(10/31)(再掲)。
(2)牛群管理ｼｽﾃﾑについて、先行導入している大阪府立農芸高校と畜産専攻学生が Web で意見交換会(12/9)。</td><td>1 学生参画のもとでの専攻実習の体制づくりとその実践
(1)月単位、週単位の活動計画の共有と実践
(2)学生主体の実習実施体制の構築
2 高校教諭や企業等との交流の場の開催</td><td>1 農業高校教員との交流を深めて欲しい。</td><td>B</td></tr>
<tr><td>資格取得の促進</td><td>1 進路を見据えた資格取得の奨励
2 農業機械士及び日本農業技術検定2級の合格率向上に向けた継続的な支援
3 雇用就農を踏まえたけん引免許等の資格取得支援

【評価指標】
1 特に取得推進する資格
①大型特殊免許(農耕用):全員
②農業機械士:合格率60%(R3 合格率51%)
2 日本農業技術検定2級:合格率40%</td><td><table>
<tr><th>資格・免許の種類</th><th>受験(受講)者</th><th>取得(合格)者</th><th>合格率</th><th>備考(全体取得状況)</th></tr>
<tr><td>大型特殊自動車（農耕用限定）運転免許</td><td>26</td><td>24</td><td>92%</td><td>2年生100%取得</td></tr>
<tr><td>刈り払い機取り扱い作業者安全衛生教育</td><td>23</td><td>23</td><td>100%</td><td>1年生100%取得</td></tr>
<tr><td>小型車両系建機特別教育</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>隔年開催</td></tr>
<tr><td>家畜人工授精師養成講習会</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>隔年開催</td></tr>
<tr><td>指導農業機械士</td><td>5</td><td>0</td><td>0%</td><td></td></tr>
<tr><td>農業機械士</td><td>32</td><td>9</td><td>28%</td><td></td></tr>
<tr><td>危険物取扱者</td><td>受験者なし</td><td>－</td><td>－</td><td></td></tr>
<tr><td>フォークリフト</td><td>25</td><td>25</td><td>100%</td><td>隔年開催</td></tr>
<tr><td>アーク溶接</td><td>15</td><td>15</td><td>100%</td><td>隔年開催</td></tr>
<tr><td>ガス溶接</td><td>19</td><td>19</td><td>100%</td><td>隔年開催</td></tr>
<tr><td>日本農業技術検定　1級</td><td>2</td><td>0</td><td>0%</td><td></td></tr>
<tr><td>日本農業技術検定　2級</td><td>27</td><td>2</td><td>7%</td><td></td></tr>
<tr><td>日本農業技術検定　3級</td><td>27</td><td>26</td><td>96%</td><td></td></tr>
</table></td><td>1 農業機械士及び日本農業技術検定 2 級の合格率向上に向けた継続的な支援
2 雇用就農を踏まえたけん引免許等の資格取得支援</td><td>1 狩猟免許、ドローン操作など農業経営や雇用就農で役立つ資格や資格取得につながるカリキュラムの更なる拡大・充実
2 雇用就農先では、経営規模の拡大により、準中型免許取得者を採用条件にしている等を学生に知らせて欲しい。</td><td>B</td></tr>
<tr><td>ｽﾏｰﾄ農業に関するｶﾘｷｭﾗﾑ拡充</td><td>1 花きの低ｺｽﾄ環境制御技術として EOD 冷房技術の実証
2 野菜でのﾘｱﾙﾀｲﾑ環境ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ
3 牛の繁殖等に関するｾﾝｻｰによるﾃﾞｰﾀ管理の習得
4 ﾄﾞﾛｰﾝﾊﾟｲﾛｯﾄ資格取得に向けた知識・技術の習得

【評価指標】
1-4 ﾃﾞｰﾀの収集・活用による生産管理技術の習得促進</td><td>1 卒論でｶｰﾈｰｼｮﾝの EOD 冷房に取り組み、茎が太く堅くなるなど品質向上につながったが、冷房ｺｽﾄに見合う販売に至らなかった。
2 高設いちごﾊｳｽ内の温度、湿度、炭酸ｶﾞｽ濃度等の環境状況をﾊﾟｿｺﾝでﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞし、この結果に基づく炭酸ｶﾞｽ施用を実施した。また、座学でもﾊｳｽ内環境をﾘｱﾙﾀｲﾑで確認し理解を深めた。
3 分娩監視ｾﾝｻｰ、活動監視ｾﾝｻｰの利活用方法を習得し、分娩前後の事故防止、牛の健康管理に努めた。
4 1年生対象にﾄﾞﾛｰﾝの操作方法を演習、2年生の農産園芸課程学生は農業機械Ⅲのｶﾘｷｭﾗﾑを追加して、資格取得に向けた知識と技術を学んだ。</td><td>1 花きの低ｺｽﾄ環境制御技術として EOD 加温技術の実証
2 ﾘｱﾙﾀｲﾑ環境ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞを活用したﾄﾏﾄの生育技術の習得
3 牛の繁殖等に関するｾﾝｻｰによるﾃﾞｰﾀ管理の習得
4 ﾄﾞﾛｰﾝﾊﾟｲﾛｯﾄ資格取得に向けた知識・技術の習得</td><td>1 アシストスーツなど簡易なスマート技術の紹介も積極的に取り組んで欲しい。</td><td>A</td></tr>
<tr><td>学生の主体性・規律性の向上</td><td>1 学生自治会を主体とした規律ある寄宿舎生活の実践
2 収穫祭など学校行事の企画・運営を支援することで、学生自治会主体による運営ﾉｳﾊｳの伝承

【評価指標】
1 新型ｺﾛﾅｳｲﾙｽ対策等のﾙｰﾙ遵守による発生防止
2 学生自治会主体による収穫祭、県民農林漁業祭等での企画・活動の実践</td><td>1 ﾏｽｸ着用が緩和傾向の中で、自治会は、9 月下旬に下記の「今後のﾏｽｸの着用ﾙｰﾙ」を策定し、規律ある寄宿舎生活を実践した。
(ｱ)実習作業中・部活中は、原則ﾏｽｸ着用無し、(ｲ)実習作業中以外で寮、本館、専攻棟はﾏｽｸを着用、(ｳ)体育館は、着用を推奨、(ｴ)守れない場合は、ﾍﾟﾅﾙﾃｨｰを科す。
2 収穫祭
(1)実行委員会を立ち上げ、ｺﾛﾅ対策を講じたうえで 3 年ぶりに開催(11/19, 20)。
(2)学生が育てた新鮮な野菜、綺麗な花、美味しい果物や学生が腕を振るった炊き込みご飯、焼き鳥などを販売。
(3)約1,000名の来場(卒業生、一般)で、農業の輪が広がった。</td><td>1 国のｺﾛﾅ対処方針の変更等を参考に寄宿舎生活を意識した対策の検討
2 収穫祭のﾉｳﾊｳの伝授
3 年ぶりの収穫祭開催で、細部に亘るﾉｳﾊｳが十分伝授されていない。
3 令和5年度東海近畿地区農業大学校ｽﾎﾟｰﾂ大会兵庫大会の運営</td><td>1 各種行事での工夫した点のノウハウの蓄積と発展。</td><td>A</td></tr>
</table>

Ⅲ 重点目標:就農率の向上に向けた学生指導の充実

現 状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	次年度の課題と改善策	学校評議会委員の意見	達成度
1 農家出身学生は25%、自営就農率は8% (H29-R3年度平均) 2 農業法人等への雇用就農は33%、自営就農とあわせた就農率は41% (H29~R3年度平均) 3 東海近畿ﾌﾞﾛｯｸ農業大学校の平均就農率50.0%に比べると低い (H29~R3年度平均) 4 JA、農業関連産業(農機具、種苗等)等をあわせた農業に関わる進路選択者は90.0% (H29~R3年度平均) 5 農業・農村への早期理解促進のため、40日間の農家等派遣実習をR3年度から1学年に移行 (R3年度:緊急事態宣言で17日間に短縮) 6 雇用就農や指導機関へ就職した卒業生の動向把握が不十分 (R3:雇用就農者へ動向等を確認)	学生個々の意向把握及び就農活動支援	1 個別の進路意向の把握及び進路決定後の継続的支援 2 雇用就農先とのﾏｯﾁﾝｸﾞ支援 3 施策・制度資金等を活用した就農活動支援 ---------- 【評価指標】 1・2 就農率目標 50%・進路決定率 100% 3 就農準備資金の活用	1 個人面談(5 月)での意向確認、その後ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ支援、情報提供等を実施。 2 農林機構や農業大学校同窓会のｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ事業を活用して延べ 12 名のﾏｯﾁﾝｸﾞを実施。また、兵庫県主催の就農希望者向けｾﾐﾅｰに雇用就農予定の学生 1 名が参加。(6/19)。 3 進路 33/34(97.1%)、就農者 14/34(41.2%、うち独立就農 1)、県内 JA 等 7、進学 1。 4 就農準備資金は、2 年生 2 名が就農計画を作成。新規申請には保護者面接等で就農意思確認を実施。普及ｾﾝﾀｰと連携し計画的に就農支援した。	1 進路未定者のﾌｫﾛｰ 2 就農準備資金対象者の懸案支援 就農状況報告書(年 2 回)で確認し、普及ｾﾝﾀｰと連携して課題解決につなげる。	特になし	B
	農家等派遣実習の 1 年次実施	1 実習の円滑な実施のための実習態度の醸成 2 学生と受入れ農家のﾏｯﾁﾝｸﾞ実施 ---------- 【評価指標】 1・2 農家等派遣実習単位取得 1 年生 27 名全員	1 1 年生対象の農家派遣実習を初めて 40 日間実施した(9/2～10/11)。 当初、全員の全期間派遣を予定していたが、ｺﾛﾅ感染防止対策として派遣前に実施した PCR 検査で陽性及び濃厚接触者となった学生は、隔離期間終了後に派遣した。 2(1) 普及ｾﾝﾀｰを介して調査した受け入れ農家の条件と学生の意向をﾏｯﾁﾝｸﾞした。 (2) 受け入れ農家、普及ｾﾝﾀｰ参加のもとで報告会を開催し、学生が実習成果をﾌﾟﾚｾﾞﾝした(11/20)。	1 40 日間の実習を踏まえた各自の知識・技術の向上と就農率の向上	1 派遣実習やインターシップ、農業者による授業・講演など外部の経営実践者との交流により、農業の魅力を感じる機会作りが多い点を評価。	A
	ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ等による雇用就農支援	1 雇用就農先とのﾏｯﾁﾝｸﾞ促進 2 ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ等への参加を促進 ---------- 【評価指標】 1 ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ実施学生 R3:14 名→R4:20 名 2 同窓会と連携したｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ支援制度の活用	1 県内の 2 法人、農園、牧場でﾏｯﾁﾝｸﾞ支援。 2 4 名が(公社)ひょうご農林機構の「ひょうごの農ﾄﾗｲｱﾙ事業」を活用してｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟを実施。 3 ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ促進や雇用就農者の独立を支援するため、令和 3 年度から開始した同窓会の「農業大学校創立 100 周年記念基金事業」で延べ 8 名が活用。	1 農家等派遣実習のほか現場実習の機会を実践するため、ｲﾝﾀｰｼｯﾌﾟを推進	1 雇用就農増加のため、雇用就農者との交流、県内農業法人ガイダンス等やマッチング促進など、学年毎に段階的な理解促進を更に努めて欲しい。	A
	就農意欲を向上させるｶﾘｷｭﾗﾑの充実	1 農業参入企業等との連携によるｶﾘｷｭﾗﾑ実施 2 雇用就農者や雇用就農後に独立した農業者の事例研究 ---------- 【評価指標】 1 農業法人派遣実習、県下市町が実施する就農支援事業への参加 2 「現代実践農業」、「農政時事」等での農業者による講演	1 参入企業:ｲｵﾝｱｸﾞﾘ創造(株)社長の講演(7/7)、校外学習の実施(9/8)。 2(1) 「農政時事」で県内農業者 3 名の先進事例を学ぶ。 (2) 県内の若手農業者と学生が集い、専門分科会に分かれて意見を交換(7/9)。 (3) 姫路市内の先進農家等 4 施設を訪問し、取組み状況を見学し意見交換(12/7)。 (4) 「現代実践農業」では 7 名の農業経営者から実践事例を聴講。 (5) 校外学習・実習で篤農家等を訪問し実践事例を聴講(20 回)。 (6) 農大実践研修終了生から就農の準備や心構えなどの実践事例を聴講(2/9)。	1 ｶﾘｷｭﾗﾑの充実	1 就農した直近の卒業生など、身近な先輩との懇談によって農業の魅力の理解促進に一層努めて欲しい。	A
	既卒者へのﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ	1 JA 等の指導機関就職者の現状確認及び就農の意向を把握 2 就農志向者等を対象とする支援検討 ---------- 【評価指標】 1 現状調査の実施 2 就農志向者のﾆｰｽﾞ把握及び支援策を検討	1 H26-31 年度卒業で県内 JA 等の指導機関に就職した者 51 名に現状確認(勤務継続状況、主たる業務)とｶﾘｷｭﾗﾑや寮生活への意見等を調査(回答 27 名)。 (1) 卒業時の組織で勤務継続 17 名(63%)。担当業務は、農業生産関連 13 名(76%)、信用 2 名(12%)、保険 1 名(6%)、他 1 名(6%)。また、また就農希望者は 2 名(12%)。 (2) 離職は 10 名(37%)で農業関連への再就職は 4 名(親元就農 1 名含む)。 (3) ｶﾘｷｭﾗﾑは資格取得機会の多さが役立っているとの意見が多い。また、免許取得後の機械操作回数の充実や均一化の要望や、水稲栽培、農薬、肥料に関する知識・技術の習得に努めておくべきとのｱﾄﾞﾊﾞｲｽがあった。 (4) 寮生活によって、今でも同級生、先輩、後輩と強い繋がりがある。 2 調査結果は指導機関への就職を目指す学生等へ情報提供する。また、要望内容をｶﾘｷｭﾗﾑへ反映するよう検討していく。 就農希望者は、就農支援ｾﾝﾀｰ等と情報共有し支援体制などを検討していく。	1 ｶﾘｷｭﾗﾑの充実を検討		A